

病虫害発生予報 第1号(4月予報)

和歌山県農作物病虫害防除所
TEL 0736(64)2300

＜予報の概要＞

作物名	病虫害名	発生量	作物名	病虫害名	発生量
水稲	ヒメトビウンカ ツマグロヨコバイ	並 やや少	野菜全般	アザミウマ類	並
タマネギ	白色疫病 べと病	やや少 並	カンキツ	かいよう病 そうか病 ミカンハダニ	並 並 並
エンドウ	褐斑病、褐紋病 うどんこ病	並 やや少	カキ	うどんこ病	並
キャベツ	灰色かび病 コナガ	やや多 やや少	ウメ	かいよう病	やや少
キュウリ	べと病 褐斑病 灰色かび病	並 やや多 並	果樹全般	カメムシ類	少

気象予報

1か月予報(予報期間3月25日～4月24日 大阪管区气象台)

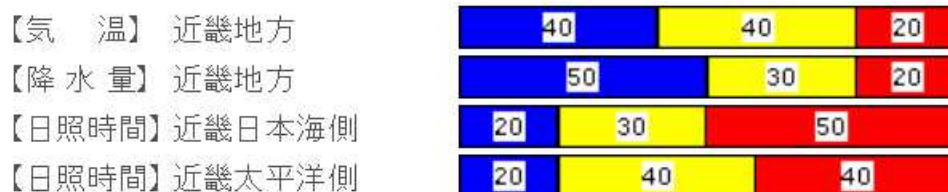
＜予想される向こう1か月の天候＞

天気は数日の周期で変わりますが、平年に比べ晴れの日が多いでしょう。

向こう1か月の平均気温は、平年並または低い確率ともに40%です。降水量は、少ない確率50%です。日照時間は、近畿太平洋側で平年並または多い確率ともに40%です。

週別の気温は、1週目は低い確率50%です。2週目は平年並の確率50%です。

＜向こう1か月の気温、降水量、日照時間の各階級の確率(%)＞



凡例: 低い(少ない) 平年並 高い(多い)

	月平均気温(平年値) (℃)	月降水量(平年値) (mm)
4月	和歌山 14.9	和歌山 100
	潮岬 15.7	潮岬 213

I. 水 稲

1. ヒメトビウンカ

(1) 予報内容 発生時期 早い
発生量 並

(2) 予報の根拠

① 3月中旬の休閑田の捕虫網20回振りすくい取り調査では、和歌山市18.0頭、成虫率82%（平成10.7頭、成虫率36%）、紀の川市8.8頭、成虫率89%（平成8.4頭、成虫率24%）、かつらぎ町1.3頭、成虫率60%（平成5.6頭、成虫率24%）であった。

(3) 防除上考慮すべき諸点

- ① ヒメトビウンカは、イネ縞葉枯病ウイルスを媒介する。イネ苗へのヒメトビウンカの飛来を防ぐため、休閑田や雑草地付近での育苗を避ける。
- ② は種時(覆土前)～移植当日に育苗箱施薬剤を施用する。
- ③ 田植え前から作期を通して、ヒメトビウンカの生息場所となる水田周辺雑草の除草管理を徹底する。

2. ツマグロヨコバイ

(1) 予報内容 発生時期 並
発生量 やや少

(2) 予報の根拠

① 3月中旬の休閑田の捕虫網20回振りすくい取り調査では、和歌山市0.3頭、成虫率100%（平成4.0頭、成虫率42%）、紀の川市0頭（平成2.0頭、成虫率5%）、かつらぎ町7.3頭、成虫率38%（平成14.0頭、成虫率52%）であった。

(3) 防除上考慮すべき諸点

- ① は種時(覆土前)～移植当日に育苗箱施薬剤を施用する。

II. 野 菜

<タマネギ>

1. 白色疫病

(1) 予報内容 発生量 やや少

(2) 予報の根拠

- ① 県北部での3月中旬の発生ほ場率は14%（平成26%）、発病株率は0.4%（過去6年の平均4.2%）であった。
- ② 4月の気象予報による。

(3) 防除上考慮すべき諸点

- ① 同一のほ場内でも発病に偏りがみられることがあるので、ほ場全体を見回り発病が集中しているところは特に丁寧に薬剤散布を行う。
- ② 排水を良好にし、降雨による浸冠水や停滞水をなくす。

2. べと病

(1) 予報内容 発生量 並

(2) 予報の根拠

- ① 県北部での3月中旬の越年罹病株の発生ほ場率は8%（平成6%）、新病斑の発生ほ場率は3%（平成7%）であった。
- ② 4月の気象予報による。

(3) 防除上考慮すべき諸点

- ① 前年の発生が多かったほ場では本年も発生しやすい。

- ② 発生が認められたほ場では直ちに発病株や発病部位を除去し、ほ場から持ち出して適切に処分した後、薬剤散布を行う。
- ③ 発病が認められないほ場でも周辺からの二次伝染が予想されるため、7～10日間隔で予防散布を行う。

<エンドウ>

1. 褐斑病、褐紋病

- (1) 予報内容 発生量 並
- (2) 予報の根拠
 - ① 県中部の露地栽培における3月下旬の発生ほ場率は40%（平年32%）、発病葉率は3.3%（過去8年の平均2.7%）であった。
 - ② 4月の気象予報による。
- (3) 防除上考慮すべき諸点
 - ① 雨が多いと多発するので薬剤散布は早めに行う。
 - ② 多湿条件で発病が助長されるので、排水対策や通風対策に努める。

2. うどんこ病

- (1) 予報内容 発生量 やや少
- (2) 予報の根拠
 - ① 県中部の露地栽培での3月下旬の発生ほ場率は0%（平年4%）であった。
 - ② 4月の気象予報による。
- (3) 防除上考慮すべき諸点
 - ① 発生初期から薬剤防除を行う。

<キャベツ>

1. 灰色かび病

- (1) 予報内容 発生量 やや多
- (2) 予報の根拠
 - ① 県北部での3月下旬の発生ほ場率は100%（前年43%）、発病株率は6.9%（前年5.0%）であった。
 - ② 4月の気象予報による。
- (3) 防除上考慮すべき諸点
 - ① 結球期に防除する場合、株元にも薬液がかかるように丁寧に散布する。なお、薬剤の使用時期（収穫までの日数）に注意する。

2. コナガ

- (1) 予報内容 発生量 やや少
- (2) 予報の根拠
 - ① 県北部での3月中旬の発生ほ場率は0%（平年3%）、1株当たり発生密度は0頭（平年0.01頭）であった。
 - ② フェロモントラップによる3月1～20日の誘殺数は、紀の川市2頭（平年10.1頭）、和歌山市4頭（過去5年の平均11.2頭）であった。
- (3) 防除上考慮すべき諸点
 - ① 同一系統の薬剤は連用しない。

<キュウリ>

1. べと病

- (1) 予報内容 発生量 並
- (2) 予報の根拠
 - ① 県中部での3月中旬の発生ほ場率は36%（過去7年の平均25%）、発病

葉率は2.8%（過去7年の平均3.7%）であった。

② 4月の気象予報による。

(3) 防除上考慮すべき諸点

① 多発すると防除が難しくなるため、初期防除を徹底する。

② 病原菌は気孔から侵入するので、薬液は葉の表裏にムラなくかかるように散布する。

③ 肥効が低下したり草勢が衰えたりすると発病が助長されるので、適切な肥培管理に努める。

④ 薬剤耐性菌の出現を回避するため、同一系統の薬剤の連用を避ける。

2. 褐斑病

(1) 予報内容 発生量 やや多

(2) 予報の根拠

① 県中部での3月中旬の発生ほ場率は55%（過去3年の平均36%）、発病葉率は12.9%（過去3年の平均6.6%）であった。

② 4月の気象予報による。

(3) 防除上考慮すべき諸点

① 多発すると防除が難しくなるため、初期防除を徹底する。

② 薬剤耐性菌の出現を回避するため、同一系統の薬剤の連用を避ける。

3. 灰色かび病

(1) 予報内容 発生量 並

(2) 予報の根拠

① 県中部での3月中旬の発生ほ場率は0%（平年2%）であった。

② 4月の気象予報による。

(3) 防除上考慮すべき諸点

① 施設内では湿度低下を図り、過灌水や滞水しないように注意する。

② 発病部位を除去し、発病初期から薬剤防除を行う。

③ 薬剤耐性菌の出現を回避するため、同一系統の薬剤の連用を避ける。

<野菜全般>

1. アザミウマ類

(1) 予報内容 発生量 並

(2) 予報の根拠

① 県北部の施設栽培イチゴでの3月中旬の発生ほ場率は、ヒラズハナアザミウマ0%（前年43%）、ミカンキイロアザミウマ0%（平年0%）であった。

② 県中部の施設栽培キュウリでの3月中旬の発生ほ場率は、ミナミキイロアザミウマ20%（過去3年の平均30%）、ミカンキイロアザミウマ0%（過去3年の平均3%）であった。

(3) 防除上考慮すべき諸点

① 気温の上昇とともに4月上旬頃から密度が増加するので、発生初期に防除する。多発ほ場では追加防除を行う。

Ⅲ. 果 樹

<カンキツ>

1. かいよう病

(1) 予報内容 初発日 5月16～25日（並）

発生量 並

(2) 予報の根拠

- ① 3月中旬の予察ほ場（無防除、みなべ町東本庄）での2年生枝の潜伏越冬病斑形成枝率は0%であった。
- ② 県南部（みなべ町、田辺市）の前年6月上旬の発生ほ場率は28%（平年51%）、発病果率は0.5%（平年2.6%）であった。前年秋期の気象条件と併せて潜伏越冬病斑量は平年よりやや少ないと考えられる。
- ③ 4月の気象予報による。

(3) 防除上考慮すべき諸点

- ① 強風雨により感染が助長されるため、常発園では防風施設の整備等の防風対策を励行する。
- ② 生育期の薬剤防除は、発芽期からほぼ10日おきに数回、抗生物質剤を散布する。強風雨直前の散布で、より高い効果が得られる。

< 果樹全般 >

1. カメムシ類

(1) 予報内容 発生量 少

(2) 予報の根拠

- ① 県内47地点のチャバネアオカメムシ越冬成虫の捕獲頭数は、落葉50リットル当たり0頭（前年0.3頭、平年0.5頭）、捕獲地点率は0%（前年19.1%、平年20.0%）であった。

(3) 防除上考慮すべき諸点

- ① 果樹カメムシ類の飛来量は園地間差が大きいので、園内での発生及び被害状況を観察し、防除は発生に応じて早めに行う。
- ② ウメ・モモなどでは、収穫前に越冬成虫の飛来が確認された場合は速やかに薬剤による防除を実施する。
- ③ ウメの被害は品種間差が大きい。小梅類等の収穫の早い品種で集中して加害される傾向があるので、これらの品種では特に注意が必要である。
- ④ カンキツでは蕾、花が加害されるので、被害が認められた場合は薬剤による防除を行う。
- ⑤ 今後の発生動向については、農業環境・鳥獣害対策室ウェブページ内農作物病虫害防除所コーナーの果樹カメムシ情報や、各地域の振興局農業水産振興課、JA等の情報を参考にする。

本情報は、下記の方法でもご覧頂けます。

○ **農業環境・鳥獣害対策室ウェブページ** <農作物病虫害防除所コーナー>

[http://www.pref.wakayama.lg.jp/prefg/070300/071400/
boujyosyo-yosatsujyouhou.html](http://www.pref.wakayama.lg.jp/prefg/070300/071400/boujyosyo-yosatsujyouhou.html)

○ **和歌山県ホームページ** <わかやま県政ニュース>

<http://wave.pref.wakayama.lg.jp/news/kensei/>

※詳しくは、農作物病虫害防除所(TEL 0736-64-2300)までお願いします。